

第19回

「価値の共有」と持続可能なまちづくり

行方市SDGs推進アドバイザー・茨城大学教授 野田真里

1. 『行方市総合戦略』にみる「価値の共有」とまちづくり

持続可能な開発において文化は不可欠であり、価値はその不可欠な構成要素である点、前回(第18回)にてご説明しました。これを踏まえて、市民の皆さまとともに、SDGsの観点から行方における地域に根ざした伝統的な歴史・文化を生かした、持続可能なまちづくりについて考えてまいりましょう。

ご存じの通り、行方市のまちづくりの基本となる政策は『行方市総合戦略』になります。行方市の総合戦略は、「なめがた市民100人委員会」等を通じた市民参加の議論を積み重ねて作られる等全国的にもユニークなものとなっています(令和3年に改定版が出されましたが、ここではそのベースとなる平成28年版を参照します)。

特徴として、「行方ならではの価値の共有」が強調されている点に注目です。「ないものねだり」から「あるもの探し」の発想の転換を行

え方と共通しています。

い、「行方市の産業、歴史・文化を徹底的に掘り起こし、行方市独自のストーリーを創り出す」としています。これを通じて「市民が住み続けたい、市外の人が住みたくなるまちづくり」を目指しますとあります(こうした基本的な考え方は令和3年度改定版にも引き継がれています)。以下、主なポイントをSDGsの観点からみていきましょう。

2. SDGsからみる「価値の共有」と「ないものねだり」から「あるもの探し」

第1に「価値の共有」は、それ自体がSDGsにおいて重要です。SDGsはまさに世界の平和と繁栄に向けて「このままでは地球社会が持たない」という人類共通の危機感と、社会変革に向けたビジョンという価値の共有を行うものです。行方市が直面する課題に取り組むうえで価値の共有をその基盤に挙げている点は、SDGsの考

り持続可能といえるのではないのでしょうか。

3. 地域資源としての歴史・文化の掘り起こし

SDGsを含む「持続可能な開発のための2030アジェンダ」では、「これら(SDGsの17)の目標とターゲットにおいて、我々は最高に野心的かつ変革的なビジョンを設定している」としています。人類の価値の共有として「我々は、すべての人生が栄える、貧困、飢餓、病気及び欠乏から自由な世界を思い描く。我々は、恐怖と暴力から自由な世界を思い描く」(第7パラグラフ)等と述べられています。

第2に「ないものねだり」から「あるもの探し」は、素晴らしい発想の転換で、開発の持続可能性に不可欠です。私も地方の農村出身ですが「田舎には何にもない」といった言葉を耳にします。行方市でも「観光の目玉となるテーマパーク等がない」といった声も聞かれます。

しかし、改めて考えてみますと「ないものねだり」をして、外から開発資源を持ち込んでも、それが地域に根付くとは限りません(失敗例の紹介は差し控えます)。「あるもの探し」で活用する方が、よ

そして、第3に、産業と並んで「歴史・文化を徹底的に掘り起こす」とが、「あるもの探し」において極めて重要です。ご参考までに英語の「文化」(culture)と「掘り起こす、耕す」(cultivate)の語源は同じで、ラテン語の「耕す」(colere)に由来します。土地を耕す意味から転じて心を耕す、つまり文化の意味にもなりました。

歴史・文化は持続可能な開発におけるこれからの地域資源であると同時に、これまでの成果でもありません。ここでも発想の転換が必要です。行方市にすぐれた歴史・文化が残っているのは「開発が進まなかつたから」ではありません。地域の歴史・文化は何もしなければ時と共に失われてしまい、掘り起こすこともできません。こうした先祖伝来の地域資源が継承されていること自体、行方市で「持続可能な開発が進められてきた成果」であり、その証しともいえるでしょう。